

25. 今後の家政学のあり方

静岡女子短大 柳原 文一

1. 家政学が急速に移り変わる社会の中に家庭の幸福を
るための学科であるためには如何にあるべきかを追究
しようとした。

2. 従来の家政学に関する文献を参照しつつ思索した
結果を発表する。

3. 生活というものは総合的な物である。今迄の家政
学は主としてその個々の場面殊に衣と食の技術の研究に
終始して来た。しかもこれらが次第に家庭の技術から専
門業者の手に移り、商品化される傾向を生じて来て、衣
と食の技術は趣味的な物と化しつつある。社会の中に豊
かな生活を築く為にはその社会に適応していかなければ
ならない。即ちその社会をよく研究しそれに如何にして
適応して行くかを研究するのが家政学でなくてはならな
い。換言すれば家政学では生活向上の支障になっている
物を見出す事、それを取り除く方法を研究する事、更に
又積極的に向上への道を研究する事が必要である。家政
学者は一つの狭い部門の殻にとじこもっていなければなら
ない事はない。今迄のは生活の中の個々の専門の学者
が殆んど大部分で、真の家政学者は非常に少なかったと
思う。家政学そのものを専門として、現在の生活の問題
点にぶつかって行くべきではなからうか。家政学者は栄
養学者、繊維学者であるよりは生活学者でなくてはなら
ないし、社会の進展に歩調を合わせ更に一步先んじなけ
ればならないと思う。